

これから幼小接続に取り組み始める小学校が「幼児教育から小学校教育への移行を円滑にする」ことを可能とする手立て—筏井弘毅（富山県小学校教諭）の生活科学習の取り組みを手がかりにして—

小幡 肇* 筏井 弘毅**

Possible Methods for Elementary Schools Looking for Smoother Transitions from Early Childhood to Elementary School Education: Inquiry Based on IKADAI's Teaching Approaches of Life Sciences

Hajime OBATA, Koki IKADAI

要旨 本研究では、これから幼小接続に取り組み始める小学校が「幼児教育から小学校教育への移行を円滑にする」ことを可能とする手立てを、筏井弘毅の生活科の実践を手がかりにして考えた。結果、第一段階、「幼児期の教育と児童期の教育が円滑に接続し、体系的な教育が組織的に行われる」ようにする、第二段階、互いの育ちを「見通した教育課程の編成・実施」に向けて取組む、第三段階、生活科を中心とした「スタートカリキュラム」作成に向けて取組むことを示した。

キーワード：体系的な教育 互いの育ちを見通した教育課程 スタートカリキュラム

1. はじめに～問題意識

1965（昭和40）年、文部大臣は、教育課程審議会へ「時代の進展と児童生徒の発達段階に即応する教育内容の改善」を諮問した。それを機に、教育課程審議会及び中央教育審議会において小学校低学年教育の在り方を改善する動きが始まった。

1967（昭和42）年、教育課程審議会答申¹⁾は、低学年社会科・理科についての改善を打ち出した。1971（昭和46）年、中央教育審議会答申²⁾は、小学校低学年教育の在り方として、「知性・情操・意志および身体の総合的な教育訓練により生活および学習の基本的な態度・能力を育てることがたいせつ」とし、「児童の発達段階に即した教育課程の構

成のしかたについて再検討する必要がある」とした。

その後、低学年の合科的な指導の推進を経て、1986（昭和61）年、教育課程審議会中間まとめ³⁾は生活科を新設した。

同年、臨時教育審議会第二次答申⁴⁾は、「幼児教育から小学校教育への移行を円滑にする観点から、小学校低学年の教科の構成については、読・書・算の基礎の修得を重視するとともに、社会・理科などを中心として、教科の総合化を進め、児童の具体的な活動・体験を通じて総合的に指導できるよう検討する必要がある」とした。

では、今日、幼小接続は、どのような状況なのだろうか。そして、これから幼小接続に取り組み始める小学校は、「幼児教育から小学校教育への移行を円滑にする」ために、どのような手立てを構想する

* おばた はじめ 文教大学教育学部心理教育課程

** いかだい こうき 富山県公立小学校教諭

とよいのだろうか。

そこで、本研究では、小学校における幼小接続の状況を探る。そして、これから幼小接続に取り組み始める小学校が「幼児教育から小学校教育への移行を円滑にする」ことを可能とする手立てを考える。

2. 研究の方法

研究の方法は、まず、文部科学省や国立教育政策研究所等の報告により、幼小接続の基本的な考え及び動向をみていく。

次に、筏井弘毅**（富山県小学校教諭）から、筏井がこれまで勤務した小学校及び現任校での幼小接続の状況について聞き取りを行う。

その後、筏井自身に、幼稚園や保育園から入学してきた子どもが学校生活に馴染むことを目指した実践（1年生4～5月の生活科学習）を語ってもらう。そして、それを手がかりにして、これから幼小接続に取り組み始める小学校が「幼児教育から小学校教育への移行を円滑にする」ことを可能とする手立てを考える。

3. 幼小接続の基本的な考え及び動向

（1）幼小接続にむけての基本的な考え

2005（平成17）年、教育課程研究センター（国立教育政策研究所）⁵⁾は、幼稚園教育では、「多様な体験を保障」し、「さまざまな体験が関連をも」ち、「新たな活動を生み出す」ようにして、生活を豊かにすることを求めた。

そして、幼児期から児童期への教育を豊かにする視点として、「生活の広がりや深まりをつくる・幼児理解と教材研究を深める・聴くことと伝え合いを育てる・人間関係の深まりに沿って協同性を育てる・小学校教育と連携する・家庭と連携する」等を示した。

2010（平成22）年、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議（文部科学省）⁶⁾は、「幼児期の教育と児童期の教育が円滑に接続し、体系的な教育が組織的に行われること」が重要であるとした。

そして、幼小接続に向けての事例集や交流活動等の取組は、ある程度行われているが、「十分である

とはいえない状況」であるとした。理由は、「『接続関係を具体的にすることが難しい』、『幼小の教育の違いについて十分に理解・意識していない』、『接続した教育課程の編成に積極的ではない』」ということである。

そこで、第一点、幼小接続の取組を進めるには、「発達や学びの連続性を踏まえた幼児期から児童期にかけての教育のつながりを理解するための道筋を明らかにする」ことが必要であるとした。

そして、幼児期の教育は「今の学びがどのように育っていくのかを見通した教育課程の編成・実施」を大切に、児童期の教育は「今の学習がどのように育ってきたのかを見通した教育課程の編成・実施」を大切にするとした。

第二点、教育課程編成は、「学力の三つの要素」を、「『基礎的な知識・技能』、『課題解決のために必要な思考力、判断力、表現力等』、『主体的に学習に取り組む態度』とし、「教育活動全体を通じて『学力の三つの要素』を培うこと」が大切であるとした。

第三点、指導計画作成についてである。まず、人とのかかわりとして、幼児期の教育では、「教職員が方向付けた課題を自分のこととして受け止める。そして、相談し調整し、「みんなで達成感をもってやり遂げる活動を計画的に進める」ことを示した。児童期（低学年）の教育では、課題を助け合ったり役割を果たしたりする、「集団規範性の形成を図る活動を計画的に進める」ことを示した。

次に、ものとのかかわりとして、幼児期の教育では、「思考力の芽生え」、「言葉の正しい使い方」、「豊かな感性と表現力の芽生え」を目指して、「教職員が方向付けた課題について、（略）感得した法則性、言葉や文字、数量的な関係などを組み合わせる課題を解決したり、場面に応じて適切に使ったりすることについて、（略）みんなで経験できる活動を計画的に進める」ことを示した。児童期（低学年）の教育では、「各教科等の指導を通じ、（略）活動を計画的に進める」ことを示した。

さらに、生活科を中心とした「スタートカリキュラム」について、「幼稚園、保育所、認定こども園と連携協力すること」、「個々の児童に対応した取組

これから幼小接続に取り組み始める小学校が「幼児教育から小学校教育への移行を円滑にする」ことを可能とする手立て

であること」、「学校全体での取組とすること」、「保護者への適切な説明を行うこと」、「授業時間や学習空間などの環境構成、人間関係づくりなどについて工夫する」等を示した。

第四点、幼小接続の取組を進めるための方策である。「連携から接続へと発展する過程」（資料1）の目安を提示し、「各教育委員会等がリーダーシップを発揮して、各学校・施設が連携から接続へと発展する過程を共有し、組織的・計画的に取り組む」ことを示唆した。

そして、研修を通して幼小接続に関する教師の資質の向上を図り、「幼児期と児童期の教育双方が接続を意識する期間を『接続期』というつながりとして捉える考え方を普及する」ことを求めた。

【資料1. 連携から接続へと発展する過程のおおまかな目安】

ステップ0：連携の予定・計画がまだ無い。
ステップ1：連携・接続に着手したいが、まだ検討中である。
ステップ2：年数回の授業、行事、研究会などの交流があるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない。
ステップ3：授業、行事、研究会などの交流が充実し、接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている。
ステップ4：接続を見通して編成・実施された教育課程について、実施結果を踏まえ、更によりよいものとなるよう検討が行われている。

2015（平成27）年、教育課程研究センター（国立教育政策研究所）は、『スタートカリキュラムスタートブック：学びの芽生えから自覚的な学びへ』を示した。

（2）幼小接続の動向

2015（平成27）年、文部科学省は、『平成26年度幼児教育実態調査』を実施し、連携から接続へと発展する過程のおおまかな目安（資料1）をもとに「市町村ごとの幼小接続の状況」を報告した。

2012（平成24）年度幼児教育実態調査では、「幼

稚園・保育所ともに未設定：1.5%（27）」、「ステップ0：10.7%（187）」、「ステップ1：8.7%（151）」、「ステップ2：62.1%（1082）」、「ステップ3：13.8%（240）」、「ステップ4：3.2%（55）」だったものが、2014（平成26）年度には、「幼稚園・保育所ともに未設定：1.4%（24）」、「ステップ0：9.6%（168）」、「ステップ1：7.8%（136）」、「ステップ2：59.6%（1038）」、「ステップ3：17.0%（296）」、「ステップ4：4.5%（79）」と、ステップが1ランクずつ上がった。

また、平成20-23年度に幼小接続期カリキュラム（アプローチカリキュラム・スタートカリキュラム）を作成・改訂した51自治体は、平成24-27年度96自治体に増加した。

そして、カリキュラムには、「交流連携計画、環境構成や授業の工夫（朝の楽しい時間の設定・モジュール）、援助・支援や指導の工夫・配慮、家庭との連携、特別支援が位置づけられている」と考察した。

4. 役員が勤務した小学校における幼小接続の状況

役員**から、自身がこれまで勤務した小学校及び現任校での幼小接続の状況について聞き取りを行った。その際、「連携から接続へと発展する過程」（資料1）の目安を手がかりにして、幼小接続の進展状況のステップを照合した。

- 高岡市立A小学校（平成元年～平成5年）はステップ4であった。生活科が始まったこともあり、幼稚園や保育園から入学してきた子どもを小学校生活へとつなぐ実践を、生活科指導計画に位置づけ、1年生4～5月に行った。
- 高岡市立B小学校（平成6年～平成9年）はステップ2であった。ほぼ小学校に隣接した保育園からの入学であった。そのため、年に数回、学校行事に園児を招待する取組を行った。
- 高岡市立C小学校（平成10年～平成14年）はステップ1であった。大規模校であり、多くの幼稚園や保育園から入学してきたため、連携が難しかった。
- 高岡市立D小学校（平成15年～平成17年）は、

ステップ1であった。校区にある保育園は、小学校から離れており、低学年の子どもや保育園児が歩いて行き来することが難しい状況だった。

- e) 高岡市立E小学校（平成18年～平成24年）はステップ2であった。この頃から「スタートカリキュラム」が話題となり、幼・保・小の連携を意識するようになった。1年生が、園児を小学校に招待し、生活科学習で作った遊びランドと一緒に遊んだ。
- f) 高岡市立F小学校（平成25年～平成29年）はステップ3であった。まず、入学してくる園児を理解するために、小学校教員が幼稚園や保育園を訪ね、学習や給食中の園児を観察した。次に、小学校入学が近づいた園児が学校を訪れる取組を行った。そして、3学期、幼稚園や保育園の先生と放課後連絡会を行い、児童理解に努めた。
- g) 高岡市立C小学校：再（平成30年～現在）はステップ1である。前回勤務したときと変化はなく、連携をする必要性を感じてはいるが、特に連携の取組は始めていない状況である。

概観してみると、幼小接続の取組をまだ始めていない状況であると言える。しかし、筏井は、幼小接続の取組を意識する以前から、入学した子どもが学校生活に馴染むことを目指した生活科学習を実践してきた。以下、その詳細を示す。

5. 入学した1年生が学校生活に馴染むことを目指した生活科学習の実践

1993（平成5）年、筏井**は、高岡市立A小学校で1年生を担当した。そして、入学した子どもが学校生活に馴染むことを目指した生活科学習に取り組んだ。以下、筏井の記述による、入学から3週間の実践の具体である。

(1) 一人一人の願いを大切にするための実態把握の手立て

生活科は、学習素材を子どもの生活の中から選択し、子どもの生活から出発して生活に戻ることが大

切である。

そのため、1年生当初の、子どもの生活や興味・関心を探ることを通して、生活科単元「学校をたんけんしよう」を構想することが重要であると考えた。

では、入学当初の子どもは、新たな小学校生活を通して、いろいろなものに出会う中で、どのようなかかわりを意識し始めるだろう。

そこで、入学から3週間、次のような手立てを通して、子どもの内面を探った。

① 友達の名前を知らせ合い、友達の輪（人とのかかわり）を広げる

毎朝、自分の名前を大きな声で言ったり、自分の好きな果物などを言って自己紹介をしたり、楽しい活動を行った。その楽しさによって、少しずつ友達とのかかわりが生まれた。帰りの会では、友達にしてもらったことやなかよしになった友達の名前を知らせ合った。そして、みんなとなかよしになりたいという思いを育てた。また、友達から上級生へ、他のクラスの先生へと、かかわりを広げていけるようにした。

② 活動空間を広げながら、学校に対するかかわり（ものとのかかわり）を育てる

玄関から教室、教室からトイレ、教室から体育館と、子どもが安心して小学校生活を送れるよう、生活の必要に応じて活動空間を少しずつ広げることができるようにした。そして、未知なる小学校に興味をもたせ、私の学校という意識を高めさせた。

③ 自分の願いを表現する場（自分とのかかわり）をつくる

入学して、1週間経過した頃、「学校でして見たいこと、がんばりたいことがありますか」と問うた。2週間後、さらに同じことを問うた。無理に願いを話させることを避け、じっくりと取り組む時間を設けた。そして、友達の願いの話聞くことを通して、時間をかけて願いが生まれてくるのを待った。

それは、そのような表現活動の場を繰り返しもつことによって、自分の願いはということなのだろうと自分を見つめ、自分に問い返すことを目指したからである。

これから幼小接続に取り組み始める小学校が「幼児教育から小学校教育への移行を円滑にする」ことを可能とする手立て

(2) 子どもの実態を生かした生活科学学習

①新たな小学校生活での出会いを生活科学学習に発展させる

入学してきた子どもは、新しい環境の中で不安や興味・関心を抱いて小学校生活を始める。そして、その新しい環境へ適応していくことから学習が始まる。

小学校はどんなところか、どこで遊んだらいいのか、誰と遊んだらいいのか等、一人一人がもっている不安や関心を捉え、「学校をたんけんしよう」という学習のきっかけを作った。そして、学校探検を通して、人やものと出会ったり、自分の問題の一つ一つ解決したりする喜びを大切に、学習への意欲を高めさせた。

②1年生になった子どもの願いは何だろう（大きな学校、先生、友達、教科書等との出会いから生まれた願い）

教師が出会いの場を設定しなくても、子どもは、迷子になりそうな大きな学校、上級生、机の上の教科書、一緒に勉強する友達や先生、いろいろな物や人に出会う。そのような出会いを通して、驚いたり、不安を感じたり、興味を示したりして、出会いを感じる。

その一つ一つに、どのような思いをもつのだろう。小さな体が、不安や期待でいっぱいになることだろう。

そこで、活動空間を広げながら、どのようなことに目を向け始めているかを探り、子どもを知ることから始めた。

入学して5日目、「学校でしてみたいことやこんなふうになれたらいいなと思うことはありませんか」と問い、「願いの風船」を書かせた（図1）。「願いが分からない人や書くことがない人は書かなくてもいいよ」と指示し、自由に書かせた。子どもは、「願いの風船」を1～2個、書いた。全く書こうとしない子もいた。「別にしたいことないよ」という子も2～3人いた。

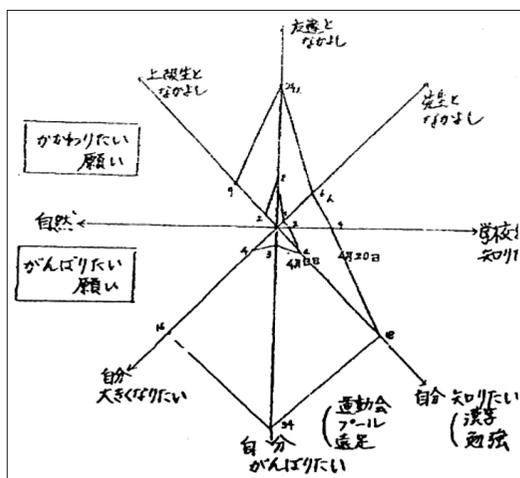
【図1. Y子の願いの風船】



10日目に、一人一人が書いた願いを紹介し合った。その後、「願いの風船」を前回と同じように書かせた（図2）。2回目は、願いがたくさんに増えた。子どもたちは、「～となかよしになりたい」という願いをもった。そのかかわりたいという対象は、友達、教師、上級生である。

しかし、自然の生き物にまでは目が向いていないようである。「友達ができるかな」という不安が願いと重なっている。さらに、「～をがんばりたい」「～を知りたい」「6年生のように大きくなりたい」という願いが強かった。がんばりたい内容は、勉強

【図2. 願いの変容】



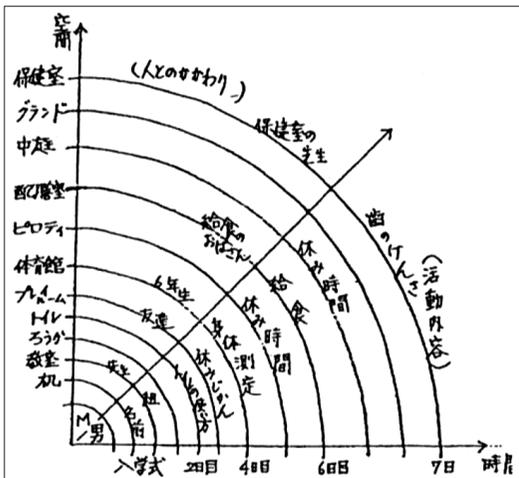
や運動会などの行事である。

3週目、子どもはようやく自然に目を向け始めた。このような、子どもの素朴な切実な願いを大切に、生活科の活動を作り出すようにした。

③子どもの見通しは理屈より感覚（屋上まで行くまでの見通し）

入学して1週間、M男は教室から、少しずつ自信をもって行ける範囲を広げた。自分の気持ちを言葉でははっきり言えないM男は、分からないことがあっても友達に聞けず、集合に遅れたり、並ぶ場所が分からず迷子になったりした。しかし、休み時間になると、友達と一緒に運動場やピロティへ遊びに出る。遊びの中で活動範囲を広げていた。

【図3. M男の7日間の活動の広がり】



2週目、子どもは、教室から保健室、2階の体育館へと活動空間を広げ、「もっと学校のいろいろなところへいきたい」と思い始めた。「今、一番行ってみたいところはどこか」と問うと、屋上という声が出てきた。保育園にはなかった屋上に一番関心があるらしい。学校が大きいという思いが、8階や7階に屋上があるという予想を立てさせている。また、6年生までいるので、6階までであるという意見に、子どもは納得した。しかし、兄弟のいる子は、2階や3階まで行ったことがある経験から、屋上が7階や8階だという意見に対し、疑問を感じた。しかし、それでも7階ぐらいの高さだと感覚的に捉え

ていたようだ。

何階あるか、実際に屋上に上ってみた。2階、3階と数えながら上った。屋上に着くと歓声を上げ、走り回った。自分の家や保育園、いつも行っているスーパーを探し、見つけると、大喜びし、教師に報告に来た。いつも見ている身近な景色が小さく見えるのに驚き、自分が少し大きくなったように感じているようだった。

④行動の表現の中に見えるその子の思い（M男とS子の活動の広がり）

自分の思いを言葉で表現するのが不得手なM男。一人うろうろしがちなM男。その行動が理解しがたいM男。そのM男の行動の中に、M男の思いを見ることができであろうか。

屋上まで行った子どもは、2階、3階の教室に関心が移っていった。そして、2階や3階へ、一人では心配で行けないというので、友達とグループになって行き、どんな教室があるか見てくることになった。

Aグループの4人が、2階に上がってすぐの児童会室を見つけた。M男以外3人は、ノートに名前を書き始めた。M男は、3年生の教室の前をうろうろし始め、みんなと離れてしまった。「Mくん、どこに行くの？」と声をかけられて、みんなのところに戻ってくる。A男がトイレに行きたいと言い、みんなで1階に下りた。2階にもトイレがあることに、誰も気づいていない。また、2階へ戻り、ランチルームをみんなでのぞき込む。M男は、2年生の教室の前をうろうろし始めるが、みんなから離れていない。

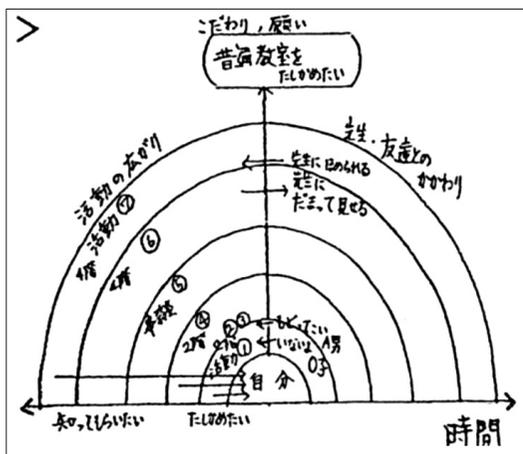
3階の廊下を歩いて4階へ行った。M男は、1階から4階まで探検する間、誰ともしゃべっていない。

しかし、4階へ来て、初めて、教師のところへノートを見せに来た。ノートには、クラスの名前の上に○×が書いてあった。何のことかよく分からなかった。

よく見ると、自分の予想と合っていると教室の名前に○がしてある。みんなと離れてうろうろしていたのは、自分の予想を何度も確かめに行っていたのだと分かり、「M男くんすごいね、よく調べたね。」と賞賛すると、にっこりした。

これから幼小接続に取り組み始める小学校が「幼児教育から小学校教育への移行を円滑にする」ことを可能とする手立て

【図4. M男の活動分析】



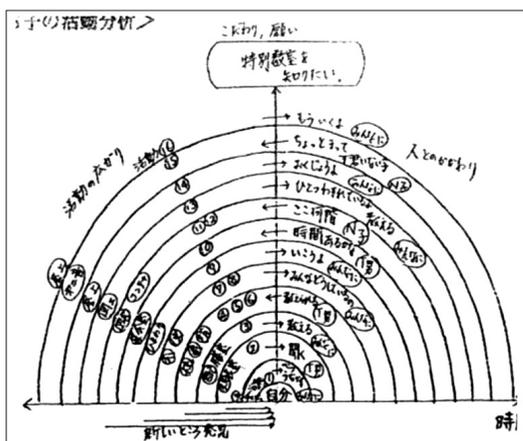
(3) 子どもを知るということ

M男は、友達とのかかわりは少ないが、自分のこだわりをもって活動を進めているのが分かった。また、みんなは特別室に関心があるのに対し、M男は2の1、2の2、3の1というようなクラスの並び方にこだわっていることが分かった。

それは、M男がマンションに住んでいて、3階の302号という部屋の呼び方と共通するものがあったからだと思われる。

一方、S子のように、友達と相談しながらどんどん活動を進めていける子もいる。書くことが遅い友達にも注意を払っている。そして、決められた時間を気にしながら、活動を広げている。

【図5. S子の活動分析】



同S子は、M男とは逆で、普通教室には関心がなく、特別教室を探すことに意欲的である。盛んに友達に働きかけ、相談しながら、活動を広げた。日頃から2階の3年生の教室によく行っているため、普通教室の位置はだいたい見当がついている。そのため、見通しをもっているS子がグループのみんなをリードしていた。

40分間の活動においても、M男とS子では、行動力や活動の仕方に大きな違いが見られた。一言も会話をせず活動するM男に対し、S子は友達と常にかかわりながら活動を進めている。

活動空間や人とのかかわりに大きな違いはあるが、M男の活動の中にもS子の活動の中にも、その子の思いやこだわりを見ることができる。M男の場合は、そのこだわりが活動を引き起こしている。

入学してから3週間、子どもの実態を探り、子どもを知るということを大切に、子どもが学校生活に馴染むことを目指した生活科学習であった。

6. これから幼小連携・接続に取り組み始める小学校における「幼児教育から小学校教育への移行を円滑にする」ことを可能とする手立て

第一点、入学当初の、子どもの願いは遊べる友達をつくることであり、活動空間の広がりや人とのかかわりにおいては個人差があることが分かった。

第二点、一人一人がこだわりや思いがもてるように支援したり、一人一人の表現の中にその子らしさを発見し、認め励まし、さらにその個性が発揮できるように支援したりすることによって、その子なりの願いをもって学校生活を送っていくことができるようになることが分かった。

第三点、一人一人の行動表現の中に、活動空間の広がりや人とのかかわりを引き起こす思いがあることが分かった。

第四点、子どもの見通しは、先行経験や自分の感覚がもとになっていることが分かった。

そこで、笹井の実践を手がかりにして、これから幼小接続に取り組み始める小学校が「幼児教育から小学校教育への移行を円滑にする」ことを可能とする手立てを考える。

第一段階、「幼児期の教育と児童期の教育が円滑に接続し、体系的な教育が組織的に行われる」ようにすることである。

筏井がこれまでに勤務した小学校では、ステップ1の状況が多かった中、「スタートカリキュラム」が話題となり始めたことによって、幼・保・小の連携が強く意識され始めた（ステップ2に）。

そのことから考えると、幼・保・小の教師が「スタートカリキュラム」を話題とし、研修を通して幼小接続に関する教師の資質の向上を図り、「幼児期と児童期の教育双方が接続を意識する期間を『接続期』というつながりとして捉える考え方」を共通にすることから始める必要がある。

そして、筏井が、子どもの実態把握に努め、M男・S子のこだわりや思い・活動の広がり等をとらえたように、幼児期から児童期への教育を豊かにする視点を共通理解し、「子どもの発達や学びの連続性を踏まえた幼児期から児童期にかけての教育のつながりを理解するための道筋を明らかにする」作業が求められると考える。

第二段階、互いの育ちを「見通した教育課程の編成・実施」についてである。

筏井が、入学した子どもが学校生活に馴染むことを考え、入学の日から3週間の手立てを講じて、子どもの内面を探った事例を手がかりにして、毎朝、楽しい活動を取り入れることが大切になると考える。例えば、友達の名前を知らせ合い、友達の輪（人とかかわり）を広げることや、活動空間を広げながら、学校に対するかかわり（ものとかかわり）を育てること、自分の願いを表現する場「願いの風船」（自分とかかわり）をつくることである。

第三段階、生活科を中心とした「スタートカリキュラム」作成についてである。

筏井の実践から、まず、入学当初の子どもは、新たな小学校生活を通して、いろいろなものに会おう中で、どのようなかかわりを意識し始めるだろうという意識のもと、一人一人の願いを大切にすることの実態把握を行うことが大切である。

次に、1年生当初の、子どもの生活や興味・関心を探ったことを通して、子どもの「人とかかわり・ものとかかわり・自分とかかわり」を時間

をかけ、継続的に育てることを目標として、生活科単元「学校をたんけんしよう」を構想することが大切である。

その際、筏井の実践を手がかりにして、次のような5点に留意して、幼小接続を視野に入れた学習を開発することが大切になると考える。

第一点、入学当初の、子どもの願いは遊べる友達をつくることであり、活動空間の広がりや人とかかわりにおいては個人差があることに留意し、その違いを生かすように努める。

第二点、一人一人がこだわりや思いがもてるように支援したり、一人一人の表現の中にそのらしさを発見し、認め励まし、さらにその個性が発揮できるように支援したりすることによって、その子なりの願いをもって学校生活を送っていくことができるように努める。

第三点、子どもの見通しは、自分の先行経験や感覚がもとになっている。そこで、一人一人の先行経験や感覚を生かして、行動表現の中に活動空間の広がりや人とかかわりを引き起こす思いが生まれるように努める。

第五点、幼小接続を視野に入れた学習を開発することから、次第に、「幼稚園、保育所、認定こども園と連携協力すること」、「個々の児童に対応した取組であること」、「学校全体での取組とすること」、「保護者への適切な説明を行うこと」、「授業時間や学習空間などの環境構成、人間関係づくりなどについて工夫する」等を、保育園・幼稚園と小学校の教師が協働して考えるようにする。

7. まとめと今後の課題

これから幼小接続に取り組み始める小学校が「幼児教育から小学校教育への移行を円滑にする」ことを可能とする手立てを考えた。

第一段階、保育園・幼稚園・小学校の教師が、「スタートカリキュラム」を話題とし、研修を通して幼小接続に関する教師の資質の向上を図り、「幼児期と児童期の教育双方が接続を意識する期間を『接続期』というつながりとして捉える考え方」を共通にすることから始める。

そして、幼児期から児童期への教育を豊かにする

これから幼小接続に取り組み始める小学校が「幼児教育から小学校教育への移行を円滑にする」ことを可能とする手立て

視点を共通理解し、「子どもの発達や学びの連続性を踏まえた幼児期から児童期にかけての教育のつながりを理解するための道筋を明らかにする」作業に取り組む。

第二段階、互いの育ちを「見通した教育課程の編成・実施」に向けて、小学校においては、入学した子どもが学校生活に馴染むことを考え、人とのかかわりを広げること、活動空間を広げながらものとかかわりを育てること、自分の願いを表現する場をつくり自分とのかかわりを育てることに取組む。

第三段階、生活科を中心とした「スタートカリキュラム」作成に向けて、入学当初の子どもは、新たな小学校生活を通して、いろいろなものに出会う中で、どのようなかかわりを意識し始めるだろうという意識のもと、一人一人の願いを大切にするための実態把握を行う。

そして、1年生当初の、子どもの生活や興味・関心を探ったことを通して、子どもの「人とかかわり・ものとかかわり・自分とかかわり」を時間をかけ、継続的に育てることを目標として、生活科単元「学校をたんけんしよう」を構想する。

その際、次のような5点に留意して、幼小接続を視野に入れた学習を開発する。

第一点、入学当初の、子どもの願いは遊べる友達をつくることであり、活動空間の広がりや人とかかわりにおいては個人差があることに留意し、その違いを生かすように努める。

第二点、一人一人がこだわりや思いがもてるように支援したり、一人一人の表現の中にそのらしさを発見し、認め励まし、さらにその個性が発揮できるように支援したりすることによって、その子なりの願いをもって学校生活を送っていくことができるように努める。

第三点、子どもの見通しは自分の先行経験や感覚がもとになっており、それがもとになって一人一人の行動表現の中に、活動空間の広がりや人とかかわりを引き起こす思いが生まれることを大切にすることに努める。

このような、幼小接続を視野に入れた学習を開発することから、生活科を中心とした「スタートカリキュラム」作成を、保育園・幼稚園と小学校の教師

が協働して考えるようにしていく。

しかし、これから幼小接続に取り組み始める小学校は、「幼児教育から小学校教育への移行を円滑にする」ことに対し、個別の課題を有している。

本稿では、その個別の課題に踏み込んで、「幼児教育から小学校教育への移行を円滑にする」手立てを探ることができなかった。

また、保育園・幼稚園の状況に対しても踏み込んで、「幼児教育から小学校教育への移行を円滑にする」手立てを探ることができなかった。

今後の課題としたい。

参考・引用文献

- 1) 教育課程審議会「小学校の教育課程の改善について(答申)」, 昭和42年
- 2) 中央教育審議会「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本政策について(答申)」, 昭和46年
- 3) 教育課程審議会「教育課程の規準の改善に関する基本方向について(中間まとめ)」, 昭和61年
- 4) 臨時教育審議会「教育改革に関する第2次答申」, 昭和61年
- 5) 『幼児期から児童期への教育』教育課程研究センター(国立教育政策研究所), 2005(平成17)年
- 6) 『幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)』幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議(文部科学省), 2010(平成22)年

